



障害者との出会いの体験談 (10)

理事長 荒木直躬

私が初めて障害者のいる福祉施設を訪れたのは19歳になったばかりの頃だった。神奈川県にあるそのYと言う施設には、100名の手足の不自由な児童が住んでおり、そこで治療や訓練を受け、併設された学校で義務教育を受けていた。かなり重度の脳性麻痺が全身に及び、一日のほとんどは寝たきりであるT男、両手が肩のところから切断されてしまった(道路横断中に転び伸ばした両腕の上をトラックが通過した)S雄、生後間もなく重度の脳性麻痺を引き起こし、両足が腰からぶら下がっているだけになっているN子、両腕麻痺の障害のうえ、聴覚障害を伴っているM夫、全身に麻痺があり中程度の知的障害を伴っているD男ほか、6歳から19歳までの男女100人が起居しているそこに、1ヶ月半のボランティアとして春のある日、何の予備知識も持たずリュックサックひとつで訪ねた自分の軽率さが悔やまれていた。

着いてすぐに入浴介助を命じられ、男子の障害のある肢体の全裸を目にし、抱きかかえて浴槽に入り、体を洗い、脱衣所で待つ職員に渡す作業はとて骨が折れた。この施設についての私の知識は「肢体不自由児施設神奈川県立Y園」という名前だけだった。元々、突然県庁を訪れて、子どもの施設でお手伝いをしたいと児童課長に無理矢理お願いをした立場上もう後には引けなかった。

1961年3月のことである。当時はボランティアという言葉も使われていなかった。「施設に慰問に行く」と言ったものだった。一応学校で社会福祉を学びはじめたとは言うものの、専門科目は何も学んでいない、障害者という言葉も知らない、肢体不自由の意味も知らない、只、そういうところでは何か役に立つことが出来るだろうとそれだけの思いで頼み込んでしまった3月1日から4月15日までを、どうやってすごそうかと言うことばかりしか頭になく、不自由な子ども達の裸体に仰天しているばかりだった。こんな風にして第1日目が始まったのである。

人間は、見えて、聞こえて、手足が動かせて、しゃべれるものだとばかり思いこんでいた。いや、それすらも考えていなかった私にとって、どれほどの衝撃であったかとすらも意識することはなかった。ともかくも風呂が終わり、何となく子ども達としゃべり、一緒に夕食を食べ、10時の消灯と同時に解放され、翌日は午前6時に男子棟に来るように言われ、私が寝るために夜間のみ使用を許された、通いの職員の休憩室で布団の上に体を伸ばすなり、前後不覚になるほど疲れ切っていた。

翌朝は5時には起き上がり、身支度を調べ、部屋の拭き掃除をし、子ども達のところに着いたのは6時ぎりぎりだった。指導員にものすごい目でにらまれ「遅い」と一言怒鳴られ、何時に出勤すれば良いのかと聞いたところ、「遅くとも定められた時間の30分前」と言われて、朝五時半から夜十時まで、休憩・休日なしの1ヶ月半と思わずため息が出てしまい。「何か言ったか?」と言う指導員の間に、悔し紛れに「楽しみだと言ったんです」と言い返し、にやりと笑ったその指導員が思いのほか良さそうな人だと思ったものの、そのまま仏頂面を改めずに、寝ている子どもを起こしにかかった。

こうして始まった日々は、その後の私の人生に何か決定的な影響を与え、いまだにそこで疑問に思ったことには未解決の事柄が多く、私を揺さぶり続けているのである。(続く)

8月・9月の予定

8月6日(木): 摂食指導

10日(月): 山の日(休業日)

13日(木)～16日(日): 夏季休業

17日(月)～21日(金): 健康チェック週間

9月14日(月)～18日(金): 健康チェック週間

21日(月): 敬老の日(休業日)

22日(火): 秋分の日(休業日)

～ けやき ミニ・ギャラリー

① 季節の工作

「散歩道にあるあじさいがだんだん色づき始めた」そんな様子を皆で作り上げられないかと考え、6月の創作は障子紙に絵の具を染み込ませたにじみ絵を行いました。絵の具が染み込んでいく様子を大きくして見つめる人や自分で色を選んで取り組む人が見られました。

7月は七夕飾り。毎年恒例の笹飾りには願いを込めて短冊を飾り、7月7日の七夕会で楽しい一時を過ごしました。しばらくは、新型コロナウイルス感染拡大の心配からイベントが実施出来ないのも、少しでも気分転換を図りつつ季節を感じていただける機会を、と思っています。(藤平)



② 梅ジュースづくり

職員が持ってきてくれた青梅を使い、皆さんで梅ジュースを作りました。へたを職員よりきれいに取る利用者さん、その実を一つ一つ丁寧に職員に渡してくれた利用者さん。梅の実を冷凍にしてからビンに入れましたが、ビンに梅の実が入った時の音に少し驚き、そして嬉しそうな表情を見せてくれた利用者さんもいて、いつもと違う一面も見ることが出来ました。完成して皆さんにお出ししたときの反応を見るのが今から楽しみです。(山田)



標高 3,776m、言わずと知れた日本最高峰の山「富士山」。その日本の象徴「富士山」が世界文化遺産に選ばれたのは、自然や美しさという名山としての価値だけでなく、富士山という存在に対して日本人が抱いている信仰や富士山を通じて生まれた芸術の源としての価値が国際的に認められたからだと言われています。

私もその「富士山」の美しさや壮大さに魅了され、かねてからあの山の頂上に登ってみたいなあと思っていました。そして、ずっと抱いていたその思いを、昨年やっとう行動に移すことができたのです。週間予報とにらめっこして日程を決め、単身でツアーへ参加。ガイドさんの後ろにぴったりついて、いざ山を登り始めると、その動きはとてもスローペース。体が高地に順応できるように、歩幅を小さくにとって、ゆっくりと、ゆっくりと。せっかちな私にとってそれは困難な動作でしたが、一步一步丁寧に大地を踏みしめて登ること、息を吐く、吸うことを意識して深呼吸しながら歩くこと、高くそびえたつ頂に向かってしっかりと前を見ながら進んでいくことは自分の体や心と向き合うとても良い時間や機会になりました。

早朝の悪天候の為、頂上へまでは行けず、後ろ髪をひかれる思いの 8 合 5 尺までの登山となりましたが、そこで見たご来光や眼下に望む雄大な景色、自分の足で登ったという達成感や充実感、それまで自分が抱えていた悩みや問題をスッと和らげてくれ、次に繋がる大きな力を与えてくれました。今年こそは、頂上を目指すぞ！と挑戦状を用意していた所ですが、コロナの影響で断念せざるを得なく、残念に思っています。

現在、コロナ禍の状況で、様々な事が制限され、自粛しなければならないことが増えています。だからこそ、自分のやりたいこと、好きな事が改めて分かったように思えます。そして、普段の生活の中でも今まで何気なくしていたこと、目の前に当たり前にあったことやしていたことが自分にとって、とても大切なことで、自分の気持ちの安定を保つことにとても重要な事であったのだと気づかされています。

私たちの仕事は、感情労働とも言われています。それは、アメリカの社会学者 A・R・ホックシールドが提唱した概念で、体力を使って対価を得る「肉体労働」、アイデアなどを提供する「頭脳労働」に対して、常に自分の感情をコントロールし、相手に合わせた言葉や態度で接することが求められているとされています。自分の気持ちを整えて目の前にいる利用者さんと向き合い、お互いの気持ちを分かち合って接することは、仕事をする上でとても大切なこととなってきます。誰もが不安を抱える今のこの状況下で、それはとても大切で更に丁寧に行っていかななくてはならないことであると実感しています。今、自粛生活で見つけたちょっとした楽しみがあります。何てことのない、ほんの小さな楽しみ。でも、そんな日常の小さな喜びや幸せを、日々の活力に変えていけたらと思います。いつか富士山の頂上でおにぎりをパクンとする日を待ちわびながら。

編集後記 いつもと違う感覚の日常を既に半年ほど過ごしています。けやきでも外出企画を控えるなど、事業への影響がないことはないのですが、通所される皆さんとの日常は変わらずあり、その日常にありがたみを感じます。さて今後もなお続くこの状況であります。情報に振り回されないようにし、自分以外の人（の判断、行動）に対する寛容レベルを少し上げて過ごしたいと思っています。（今野）